

姫路お城まつり協賛

第54回

姫路城 薪能

たきぎのう

《番組》

能松風
まつかぜ
杉浦豊彦
福王知登

狂言文山立
ふみやまだち
茂山千五郎

火入れ式

能舍利
しやり
大西礼久
江崎欽次郎



日時 2025年 5月16日(金) 午後6時00分始
午後5時00分～親子教室発表会を開催

場所 姫路城 三の丸広場 (特設舞台)

雨天の場合は、姫路市市民会館にて開催*
※席数が限られている為、賛助ご招待券をお持ちの方からの優先入場となります。

ホームページ <http://himeji-takiginou.org/>



YouTube 姫路城薪能
チャンネルもご覧ください

姫路城薪能 検索



入場無料*

【主催】 姫路薪能奉賛会
【協賛】 江崎福王会・姫路能楽会・上田眞正会・大倉華月会
【後援】 お城まつり奉賛会・兵庫県・姫路市・姫路市教育委員会・姫路商工会議所・公益財団法人姫路市文化国際交流財団・姫路信用金庫ひめしん文化会



【ご案内】 JR姫路駅・山陽電鉄姫路駅から徒歩15分。

■題字：清元秀泰姫路市長 揮毫

*広告協賛席の後ろに無料席を設けております。
*協賛席をご希望の場合、当日協賛も受付けております。

●観世流能「松風」

ある秋の夕暮れのこと、旅の僧が須磨の浦（現在の神戸市須磨区付近）を訪れます。

僧は、浜辺にいわくありげな松の木があることに気づき、土地の者にそのいわれを尋ねたところ、その松は「松風」「村雨」という名をもつふたりの若く美しい姉妹の旧跡で、彼女らの墓標であると教えられます。僧は、経を上げてふたりの霊を弔った後、二軒の塩屋（塩焼き小屋）に宿を取ろうと主を待ちます。そこに、月下の汐汲みを終えた若く美しいふたりの海女が汐汲車を引いて帰ってきました。

僧はふたりに二夜の宿を乞い、中に入ってから、この地にゆかりのある在原行平の詠んだ和歌を引き、さらに松風、村雨の旧跡の松を弔ったと語りました。

すると女たちは急に泣き出してしまいます。僧がそのわけを聞くと、ふたりは行平から寵愛を受けた松風、村雨の亡霊だと明かし、行平の思い出と彼の死で終



能「松風」

わった恋を語るのでした。

姉の松風は、行平の形見の狩衣と烏帽子を身に付けて、恋の思い出に浸るのですが、やがて半狂乱となり、浜辺の松の木を行平だと思い込んで、すがり付こうとします。村雨はそれをなだめるのですが、恋に焦がれた松風は、その恋情を託すかのように、狂おしく舞い進みます。やがて夜が明けるころ、松風は妄執に悩む身の供養を僧に頼み、ふたりの海人は夢の中へと姿を消します。そのあとには村雨の音にも聞こえた、松を渡る風ばかりが残るのでした。

●大蔵流狂言「文山立」

2人の山賊が、ねらった旅人を逃がしてしまつたことから仲間割れし、果たしあいになります。見物人のいないところで死ぬのは犬死にも同然、書き置きをして死ぬのと争いを中止して、矢立を取り出して遺書を書くこうとします。

1人が文言をいい、1人がそれを書き記していくうちに、内容が妻子の将来に及ぶと、2人とも感極まって泣き出してしまいます。

そして互いに我慢すればすむことだと仲直りし、めでたく連れ立って家路をたどります。



狂言「文山立」

●観世流能「舍利」

出雲国（鳥根県）の美保の関からはる都へやってきた旅の僧が京都東山の泉涌寺へ参詣します。

この寺には牙舍利と呼ばれる釈迦の遺物（歯）が宝物として伝わっています。運のいいことに、今日は牙舍利が一般に公開される開帳の日にあたります。

寺を案内してくれた寺男にすすめられた僧は、舍利が納められた舍利殿を参拝することに決めます。僧が舍利を前に感激していると、

怪しげな雰囲気の方がやってきました。男は舍利が見たいと言って僧とともに舍利を拝み、そのありがたさを尊びますが、突然男の顔色が変わります。

男は、自分は昔、舍利を奪った足疾鬼の執心と名乗り、みるみるうちに鬼の姿に変身すると、舍利を奪って天井を蹴破りどこかへ飛び去ってしまいました。

大きな物音に驚いた寺男が、僧のところに駆けつけます。僧から話を聞いた寺男は、かつて釈迦が亡くなる時にも足疾鬼が現れ、舍利を取って逃げたという故事を語ります。

その舍利は韋駄天によって取り返されてのち、泉涌寺に納められました。今また奪われたのは、その時の舍利です。

今度も、舍利を奪還しようと韋駄天が現れます。韋駄天は天上世界の隅々まで足疾鬼を追い回し、下界へと追いつめて舍利を取り返します。捕えられた足疾鬼は力を失い、どこかへ消えていってしまいました。



能「舍利」